

裕一は液晶モニターではなく、アクリルボードを覗いた。

最初透明だったボードはうつすら海底の映像を映し出した。

並行する意識世界、『ウオド』を表示させる『ウオドパネル』は世界を垣間見る窓であり、それは裕一の能力で映像化された世界だ。

裕一はみずきが『イメの渚』を超えて『ウオドの世界』に入り込んだのを見ることを垣間見ることができた。みずきはもぐりながら、海底の操縦席にある舜に近づいているのを見ることが出来た。

「こんどはうまくやれよ。舜、みずきちゃん。」

海底の舜は操縦桿を握り、力を込めていた。みずきは舜の前に顔をだした。

「舜くん。君の意思だけではゴーレスは動かない。前回ゴーレスが立ち上がったのはなぜだと思う？」

「ゴーレスが望んだから。たしかでも後で苦しくなった

のは僕が自分のことだけを考えていた。ゴーレスには心がある。ゴーレスの意思に反して動かしたからこの前は怒りを買った。」

「それだけわかっているなら今度は大丈夫。じゃあ私に任せて、ゴーレスに伝えたいことがあるの、少し後ろに下がっていい。」

みずきはすこし浮かび上がり、太陽を背にうけて、海底の操縦席周辺の岩塊を見渡すようにしていった。舜はみずきの後方から様子をうかがった。

「ゴーレスよ聞け。今度はお前が必要だと言った水の魂をお前に渡した。お前の声をききたい。」

海底から水を震わせるように声が聞こえた。

くわが名は守護神、この島の守護神。人の子らよ、また来たのか。なぜ我が眠りを起こしたのだ。王家の子孫達よ。何故か。理由を言え。>

「お前が水の神の魂がなくては動けないといったからだ。舜は水の底の女神の元へ潜って行き、水の魂ももらったのだ。」

では守護神よ、この島の守護神でありながら、なぜ人々の祈りを聞いてはくれないのか。400年前の薩摩の侵

攻、66年前の沖縄戦、いずれも我が祖先たちが戦い、そして、平和のためにお前を呼んだ。『この島の守護神よ、どうか我らに力を』と。しかしその願いは叶えられなかった。多くの人は死に、民は苦しんだ。この問いにどう答える。」

地響きと水の振動と共にその声は聞こえた。

<人の子らよ、神の声を聞け、かつて我が古代戦士であった頃のかつての主(あるじ)、偉大なる神官の言葉だ。

『人も神も力を尽くしても運命には逆らえない。

ただ神には運命の流れを変える力がある。

そして千年に一度の覚醒で運命を変え、世界を変える。

時を待て。星の導きの長き時を待て。』

つまり、人の子らよ、運命を簡単には変えられない。私の手では千年の世代を超えなければ技を使っははいけない。島に災いが来ようとも時が来ぬ限りはだ。>

「ごたくを並べるな！ 何のための守護神ぞ！」

その言葉に怒りを感じたみずぎの右手から魚雷のようなエネルギーの波が発せられた。衝撃波はゴーレスが眠っている海底の周囲のテーブル珊瑚や枝珊瑚の森を次々に直撃して珊瑚は破壊され、熱帯魚達は散り散りに去っていった。

閑散とした海底にはフジツボと石灰岩の岩塊が丸出しになった。

みずぎは怒りをさらに言葉にぶつけた。

「貴様、この地に生まれた命を預かる神だという自覚はあるのか？ 今まで幾万の祈りを踏みにじったのか！」

<人の子が神に願ったところで何となる。運命は人受け入れろ。この小さき島など人の子が何度も地図の色を変えてきた場所であろう。神の手は人々が受け入れた運命を止めることはできないのだ。時は来ぬのか！ 復活にも定めの時があるのだ！>

周囲の海水温が急激に熱くなった。海底に地割れが走り、海底火山の爆発が続いた。地割れからじわりじわりとマグマが流れた。危険を察知した二人は後退した。

「みずぎちゃん、この氷の剣を！」

「わかった！」

舜の腕から何本も氷の剣が生まれた。

「この島の王の命令を聞けぬか、ゴーレスよ！」

舜は叫び続けた。

舜が作りだした氷の剣を振りかざし、いくつもみずぎが投げ続けた。

みずぎが投げた剣はマグマとぶつかり合い蒸気を上げた。

た。そのせめぎあいの中で次第にマグマは凍りついた。そして土煙が落ち着き、静寂になった海中でゴーレスの言葉が響いた。

<今この時、わたしに何をなせという。イクサは来るのか。私には戦うことしかできぬ。平和な時に何も出来ぬ神など何の意味があるうか。>

舜はやわらかい言葉で言った。

「平和だからこそだよ。あなたにいてほしい。それだけだよ。」

この島に一本の頼れる剣（つるぎ）がほしいのだ。

この島が負ける歴史はもう見たくない。

私が本当の王の魂を受け継いだものならば、これを王の命令とする。

行こう。ゴーレス。立ち上がって現世（うつしよ）に行こう。」

<しかし…現世にあるあのブリキの人形が私の体なのか。

わたしの体はグスクのようではなければいけない。目覚めでも魂の入れ物がこれでは……。>

みずきは怒鳴った。それは少年のような別の低い声に聞こえた。

「<長き眠りが身も心もただの傀儡（くぐつ）、人形になりかわったか！我が守護者よ、戦士の魂よ。お前が死んだ事を一番悲しんだ私を忘れたか！お前を神として祭り上げたのはこの私だ。お前にいつでも見守ってほしい。この思い忘れたか！>……ゴーレスよ、これはたぶん私の中のあなたの主人の魂からの声。私の内にある星の魂を見て。ゴーレス。」

みずきは海面を見上げ、天から落ちてくる星屑を両手で受け取った。

「多分、これがあなたの主人の印、私の中にあるスバルの星の印。」

スバル星、プレアデス星団の形に7つの星が手の中で光った。

<あ、あなたは我が主…スバルの姫の生まれ変わりなのか……>

「多分…私は星の印を持つ古代の神官の生まれ変わり。」

だから今があなたの言う『時』ではないのかしら。星の導きの時は来たわ。」

<そろそろ目覚めの時なのか……わたしは覚えていない、戦士であったころ見たものの多くを。>

ただ我が主の言葉と私は宿敵に殺されたということ。

そうだ、わが国は滅び、そして民は南へ逃げた。私の魂はこの島に勝利をもたらすためにいるのだ。>

「古代戦士の魂がよみがえってきたようだな。ゴールスよ。みずきちゃん二人で言おう。ゴールスの覚醒の言葉を。」

二人はゴールスが眠る海底を指差し、

「いまこそ、今度こそ我らに勝利の歴史を！ スバルの神官と王の御名によって命ずる。守護神ゴールス蘇れ、立ち上がれ守護神ゴールス！」

<俺は、俺を取り戻すために立ち上がる！ 神官と王よ。私は立ち上がる。そして動く、そして戦う！>

周囲の海水を吸い込みながら、次第に海底が浮かびあがっていくのを舜は見た。それは黒い大きな影が地面の底から起き上がって行く様であった。

「なにやってるの。早くあがりましょう。吸い込まれてしまう。」

みずきに手を引かれて早い水流を逆に進み、水上に上がった。気がつくや舜の体はコクピットに座っていた。

「ダイブイン成功。今度はゴールスが目覚めた。」

みずきは目をしずかに開いた。

線香が根元まで燃え尽きていた。

小夜子が顔を覗き込んだ。

みずきは晴れやかな顔でその顔を見た。

「大丈夫、彼も大丈夫だよ。まだ終わりじゃない。つづけましょう。」

親指を立てた。

「みずき、グッジョブしようね！」

小夜子も合図した。

辰巳がメインモニターを指差した。

「脳波接続、ゴールス本体の各レセプター間の情報量増大。起動率120%」

裕一の前のアクリルボードは中心からしだいに円形の虹が広がっていく映像が現れていた。広がりきった後、オリオンの散開星雲の輝きに似た美しい光の雲が表示された。

……いける！

「辰巳さん！『ウオドグラフ』は散開星雲の星の生成を

示している。」

「それなら裕一君、君から舜に伝えてあげろ。」

「いけ、舜！『新しい星の誕生』だ。オールスタンバイで発動せよ！」

コクピットの舜は駆動アクチュエーター系起動スイッチをオールONにした。

「いくぜ、ゴーレス。」

そして心の中に声が聞こえた。

くすべては我が王の言葉のままに。>

舜がペダルを踏むと、ゴーレスはゆっくり立ち上がっていった。

少し動くと、シューっと水蒸気が各関節から放出されていった。

ゴーレスのメインカメラはみずきを見下ろした。それは分厚いバイザーから薄くレンズの反射を見せるだけであった。

目の前に立つみずきはゴーレスの目のない顔の「目」を

見つめた。

「人間以上の肉体を君に与えたよ。立派な戦士の体。これは不服か？」

君に現世を守ってほしい。これが私の気持ちだから。」  
シューッ。

熱さを感じない強い排気がみずきの前にあたり、スカートがなびいた。みずきはゴーレスの声を聞いた気がした。「ゴーレス、これからよろしく。」

そして徐々に直立にゴーレスが立ち上がった。18メートルの躯体が立ちあがると天井にぶつかりそうであった。

「小夜子、シャッター全開放！」

「あいよ、兄貴。」

シャッターを開放させると、ゴーレスは頭をかがめた姿勢で工場を抜け出し海岸へと出た。

東海岸、百名ビーチの夕方は薄い夕焼けを水平線に残し、天空から少しずつ星の明かりを見せていた。夕闇が暗くなる中、工場前のライトをつけて、周囲を明るくした。

南の新原ビーチ側、数百m離れたところでビーチパーティをしていた若い男女一団は、ライトに浮かび上がる黒い

躯体にびっくりした。

「あ！ あれよー、ぬーやが！（ありゃ、なんだこれ。）」

「ロボットみたいだけど……。」

「やしが、でーじまぎさよ。（だけど、すっげえ大きいな）」

「あの建物よ、アクチュエーターつくってたんか。人型は始めてみた。」

「まるで巨人だわ。」

ビール片手の彼らはゴーレスの立ち姿をみつめていた。そしてデジカメラでその雄姿を動画で撮影した。

ゴーレスは頭、肩、腰、それぞれのサーチライトを点灯させ、海と海岸の境目、岩礁に気をつけて歩きだした。

小夜子とみずきはその黒い躯体を見上げた。

「やったね。みずきちゃん。」

「魂も体も舜の力で動いている。どんな仕事だってできる。そして決して誰にもまけない。『僕達の守護神』だから。」

「くー。いいねー、僕達の守護神。そのせりふ『萌え

』、いや『燃え！』て感じ。行け！ しゅんー。守護神  
ゴーレス全力前進、発進！」

小夜子は海に向かって指をさした。

「さよちゃん。全力前進……、どこにいくの？」

舜が小夜子のインカムに答えた。

「敵よ、敵、世界征服をもくろむ悪のギトギト団とか……

サンダーバードみたいにあの椰子の木の裏からロケットに乗って救助に行く！」

小夜子は妄想に興奮していた。小夜子のオタク加減に舜はあきれた。

「さよちゃん、あのねー。動くのでやっとなんだよ……。」

裕一は笑いながら指令をだした。

「んじゃ、準備体操だ。ポーズをいろいろ決めてみる。

スクワットからだー。」

「出番最初でいきなりこのポーズか、間抜けだよな……

……。」

「つべこべいわず、やれよ、舜。」

舜は足のペダルの加減でスクワットを十回繰り返した。

「よし、次は空手の突きだ！」

今度は両手で操縦桿を持ち、ペダルで足を固定して右桿を前に突き出した。

空手の演舞のような動きが続いた。

小夜子は比嘉辰巳の肩をもみながらいった。

「比嘉さんよー、あれかっこよくないー。地味よ、地味。ロボットアニメみたいに空飛んで敵と対決するとか……。ねー。」

辰巳は苦笑いしながら

「うん、かっこよくない。でもあの大きさで空手の型ができるだけ、世界屈指のアクチュエーターにちがいない。

おれは心から嬉しい。……つもり。」

「さーよー、お前妥協しろ。にーにーがどれだけ努力したと思ってるんだ。ゴーレスがこうしてここに立っているだけでかっこいいじゃないか。」

「うーーん。さーよーは納得……という事にしておく。」

砂に「の」の字を書く小夜子に裕一も苦笑しながらうなずいた。

駐車場に連続して車が止まった。

「来た来た。きたな、宴会大王達が。」

停車した車のスピーカーからレッドツエツペリンの

「Goodies Badtimes」が大音響で聞こえてくる。

アオギを担いで入ってきたのはベルボトムにサイケなシヤツの長髪男 稲田作太郎だ。

「おいつす！ 辰巳ちゃん、ついに完全起動だつて！」

「ああ、今日は最初から絶対いけるとおもったけど、この前のように倒れないでよかった。」

「まあまあ、みんな来てるし、お祝いの準備するよ。」

「一応、この工場にゴーレスが戻ってくるまでが実験だからな。」

「遠足の校長先生じゃないんだから。」

お互い肩を組んで喜んだ。

後ろから彼らのバンドメンバー東恩納邦夫 宇佐上美子らが入ってきた。

そして裕一と小夜子の祖父、八幡幸賢、彼をつれてきたのが現在かりゆしタイムス契約記者、女性戦場カメラマンの南今日子だ。

その後ろから上品なツーピースのスーツ姿の女性、葦原小雪が現れた。

「辰巳さん……」

「小雪……画像を送ったとおり、君の擬似神経システムがうまくいって……」

小雪は辰巳の胸をぽかぽかたたいた。

「細かいことはいいの！」

すこし間を置いたあと辰巳は小雪を抱きしめた。

「やったよ。小雪。」

「うん！ 嬉しい」

「お、御兩人いいぞ！」

「若い……もんはええのう。」

まわりはニコニコと二人の抱擁を祝福した。

今日子は二人の写真をパチパチと取っていた。

海岸では舜が第二段階の実験にでた。

「裕一、みずき、千代金丸を抜いてみる。」

「うん。必要な作業だ。いってみよう。」

ゴールスは刃渡り9mの背中の大刀、千代金丸を抜こうと手をかけた。

半分刀を鞘からだしたところで、みずきが声をかけた。

「ちょっとまって……やめましょう。今日は。」

「なぜ……」

いきおいがついている舜はとまどった。

「わからない、でもやめたほうがいい。」

刀を鞘に収めた。

「そーだな、みずきちゃん。舜、おつかれ、きょうはここまでにしよう。」裕一はまとめた。

「〇〇今日はこれでおしまい。ゴールス、お疲れ。」

ゴールスは工場へ戻った。天井にぶつからないように少し屈むポーズがまるでのれんをくぐって店に入る動作のようだ。これは二足直立型アクチュエーターには難しいポーズであったが、難なく重心を移動させて工場に入った。多くの大型アクチュエーターが動物型で後部ランサー付き、すなわち『しっぽ付き』であることを考えると巨人型の成功は世界的な成功作かもしれなかった。

みずきは工場に戻らずに海を見つめていた。小夜子はみずきに聞いた。

「どうしたの。まさか、なにか予感？」

「うん。海の方から何かがくる。そして空の上から見られている。」

小夜子は妄想した。悪の秘密組織来た?????



嘉手納基地 弾薬庫地区 地下シェルター内 特殊作戦  
軍東太平洋方面軍司令部 データ解析室

トーマス・ベラード大佐は日本領内の対テロ対策用定時  
定点観察の画像数千枚の中から、2週間前に撮られた衛星  
画像に疑問を呈していた。

「この建物、やはり武器を作っているのか？ この熱量と  
大量のレアメタル反応、この衛星画像、本島南部のビーチ  
沿いだぞ。こんなところで？」

ニーナ・アルナックス博士は大型卓上モニターを見なが  
ら、「トタン屋根を透過して見える画像はあきらかにそう  
よ、このシャープな線、AMM（アクチュエーターマシン）  
いや、AAM（アーマードアクチュエーターマシン）ね。角  
度を変えてみて。」

ジャン・コンセーユはタッチパネル式モニター右下の球  
体画像のコンソールをすべらせるように動かして角度を変  
えた。

3点の観察点、衛星画像2点と成層圏ステーションから  
の赤外線と多ベクトルの合成画像は、赤黄緑色で明らか  
な形をあらわした。

「二足歩行のミだわ。だいぶ大型の。」

「あーあ、民間がつくつちやったのかね。でも町工場だ  
よここ。」

ジャンはなんだかよくわからないという顔で、グーグル  
アースの可視光線画像のボロいトタン屋根の工場のプリン  
トした写真とテキストをニーナにわたした。

「南城 City 旧玉城地区 百名ビーチ 近くの名所旧跡  
は 受水走水

沖繩に上陸した神様が始めて田んぼを作ったところ。そん  
な地味な田舎。無料のビーチなので、キャンプやビーチパ  
ーティのメッカ。秋のいまごろは泳ぐ人がぼちぼちといっ  
た感じ。つぎの休暇行ってみる？」

「休暇はおいといて、米国本土から量子多次元解析機は  
もうすぐ届くでしょ。」

「まー、一週間後。……て、ニーナ、君が想定している  
のは……？」

「たぶん『能力者』、『ウォード粒子』がからんでいる  
か確かめて見るわ。」

「……。」  
白いデータ解析室は静寂に覆われた。

苦笑によって静寂を破ったのは大佐だった。

「ふふふ、おもしろい。面白い、万が一、『能力者』がらみだと面白いな。調査の必要あり、そして解析機到着とともに新兵器の準備をはじめよう。科学の進歩に彼らは『協力』してくれるかな？」

トーマス・ベラードは苦笑が止まらなかった。

同じ頃、うるま市津堅島の陸上・海上自衛隊分屯地に隣接する桐丸エレクトロニクス・ニューロコンピューティング研究室では2週間前に観測されたデータの確認作業を研究員宇都宮桜が行っていた。日本有数の擬似生体コンピュータ『オノゴロ』が格納されている直径20mの白いドームが異様な存在感を見せている。

「所長。10月1日のウォード粒子の発生状況。今年の東太平洋大震災以来の極大値を発生させています。震災当時、茨城県鹿島市で計測された通常の700万倍には及びませんが、2年前からの国内通常時平均計測値の約1万倍、充分考慮に値する数値です。」

モニター上のオシログラフの脈動に目をやった所長、小佐田俊彦は桜の左肩を叩いた。

「宇都宮君、やはり、葦原君達のアクチュエーター計画の結果。彼らは『思考の増幅』に成功した。そう言ってい

いかね。」

「は、はいしかし、この脅威の数値、公式に認めてしまつては……。」

「口ごもる必要はない。彼らがやったんでしょ。ここは独立愚連隊だ、桐丸の上の連中に配慮する必要はない。彼らが連中やユニオンカーゴに狙われるのは時間の問題。そして『能力者』は研究対象としてモルモットにされかねない。我々が保護したほうがいいと思うんだが。」

「はい。巨大資本に有能な人材と『能力』を持った者達が振り回されるのを見たくはありません。」

「彼らの仕事ぶりを偵察してほしい。そして、我々との提携を願うんだ。」

するとモニター上に>CAUTION!<の文字が点滅した。

「南城市の現在のウォード計測数値は急激な増加を見せています！ 前回以上です。」

「大地を揺るがすだけの増幅力だ。これは見逃すわけにはいかん。大地を揺るがす……いや、もしくは膨大なエネルギーを完全に制御して内包しているというのか……！」

桜は手書きの日記に走り書きをした。

「2011年10月14日 中学の時、神戸で変わった

私の運命。運命はまた変わりつつあるんだ。ウォード粒子は人の心、そして運命。私は運命を知るコンピューターを手にしている。今日のデータを見る限り、君達もきつと成功したんだね。人の心で動く一連のCPUとアクチュエーターの擬似生体システムを。なんにしても私は手助けしなければいけない。たぶんそう。」

何かの危機感を感じつつ浜辺で空と海を見つめ続けるみずき。

安穩としているそのほかのメンバー。

いつも不安ばかりの舜。

そんな彼らの思惑を超えた動きが始まりつつあった。

つづく